

淨土

1983-7

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一冊一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運轉省 (特別送達郵便) 第三二五号
昭和五十八年六月二十五日印刷 昭和五十八年七月一日発行
第四十九卷 七月号



夫婦、親子について

夫婦は互いに別々の家庭で、環境の違う生活をしていた者が、縁あって夫婦として結ばれて一緒に生活することとなったものである。ところが、何かの都合で夫婦別かれすることも考えられる。夫婦別かれすれば、元の他人に戻るのである。

しかし、その夫婦間に生まれた子供との親子関係は、そうはいかない。親子関係は父の自由にもならないし、母の自由にもならないことである。親子関係は、子供にとっても、親となった男女両親にとっても、どうにもならない。何かの因縁で親子となったものであるが、その因縁が何であるか、親と子の間でもわからないし、どうに

もならない。中には夫婦別かれの結果、子供は父方か母方のどちらかに従って行く事があっても、親子関係はどうにもならない。理窟では割り切れないしどうにもならないものである。

子供にとって、両親の夫婦別かれは誠に悲しい事で、両親は一旦子供が出来たら、決して簡単に夫婦別かれしてもらっては困る。両親の得手勝手は慎しんでもらいたいのは、子供の方から、言いたい事である。この事については、何らかの法の措置を、子供の方の側から要求したい所であらう。一旦夫婦になり、その間に子供が出来たら、夫婦は力を合わせて、我が子即ち子供

のために力を合わせて、全力を尽くして、我慢して子供の成長に当たるべきである。子供の側から言えば、両親の夫婦別かれは、あまり得手勝手過ぎると言えよう。

阿弥陀仏は、浄土において、子供のために仏の慈愛の心を説いている。両親は夫婦仲良く共同生活して、慈愛に満ちた心を注いで、仏のために育成してもらいたい。これこそは仏が浄土で仏の教えとして説いていることである。

子供に対して、親に孝行を求める前に、慈愛の心を注ぐことこそ、仏に対する教えの実行であると考ええる。仏の慈愛に対する念仏の心であらう。

世の子供に対する、親としての唱名念仏こそは、すべての事物より先行すべきことであると考ええる。

(御堂河内四市)

七月号



離欲と深正念と淨慧とをもって、
梵行を修し、無上道を志求して、
諸の天人師とならん。

——『無量寿經』四誓偈

目次

法話

ふみ月雑感

- 一子どもの心情を育てるもの一 ……………牧 達 雄……(2)
- 三つの誕生……………成 田 光 俊……(7)

青少年教育と宗教

- すばらしい子供の育成をめざして……………桑 原 法 道……(18)

(一)(口)(法)(話)

- 易しい往生と心得るのが大切……………村 瀬 秀 雄……(12)
- <随想> 夏は動の季節……………賀 幡 亮 俊……(14)

特 別 寄 稿

- ビルマの子供たち……………長谷川 岱 潤……(24)

仏教行事日録

- 七月の行事……………鷲 見 定 信……(32)

- 念仏ひじり三国志余聞……………寺 内 大 吉 ……(37)

- 浄土句集……………一 田 牛 畝 運……(30)

<表紙裏・巻頭言> 夫婦、親子について

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

をはせる。まことに情感ゆたかな夏の行事である。

しかし残念なことに都会では、天の川を仰いでも、星は輝きを失っている。童話に耳を傾けようにも、童話を口ずさむにも、あまりにも騒音がはげしい。幼稚園、小学校で、七夕のまつりを行うが、昼の行事である。家族揃っての夕餉のあとの楽しいひと時に過るものではない。七夕は、一家団らんの行事であって欲しい。

本当は、七夕は新暦でなく、旧暦で行いたいのだが、殆んどが新暦で行われるようになってきている。

新暦の場合だと、夕餉のあとのひととき、天の川はまだ中天に達しない。牽牛と織女はまだ近寄っていない。ことに梅雨の最中、星空は見えないことが多いだろう。折角の笹竹も、五色の短冊も、雨にうたれて、悲しげにうなだれてしまうこともある。子どもを失望させることも多いだろう。

旧暦だと、七日月が、西空にかわり、天の川は中天に達する。天体のめぐりによく順応し趣きは一層深まることであらう。

しかし、七夕の幽幻な情趣は、暦の新旧、都会、田舎を問わないで、できるだけ楽しい雰囲気の中で、子どもの心につたえたいもののひとつである。

二、人づくりは自然の中で

最近、森林浴という言葉が目につく。森林の中で、樹々の発する靈氣を身体全体に浴びるのである。現代病に効果があり、心身ともに健康になるといわれる。

小川のせせらぎ、小鳥のさえずり、森の香り、木梢をゆく白雲、木かげに静かに花開く森の草花……。すべてが、文明に毒された子どもの心を洗い清めてくれる。しかし、少しの油断も、おごりも許さない自然。容赦なく鉄槌をくだす厳しさを自然はもっている。そ



んな中で人は育くまれ、鍛えられる。

人づくりには、自然の道場が一番いいと思う。

だのに、そんな自然が、どんどん破壊され緑が消え去ってゆく。開発、建設の名のもとに……。そして、より淋しく悲しいことに、自然保護、自然村などの名目で、自然が侵されていくのを目にすることも多い。

第一次産業と呼ばれるものは、自然に一番近い産業であるが、その中で、農業は自然の中で作物を育てるという点で、基本的なものであるといえる。

したがって、古来、教育と、農業とは、深い関係があるとみられてきた。玉川学園の創設者、小原国芳氏は、農学部を重視し、労作教育の基本に、農耕をとり入れている。また英国民の人間教育は、農業を重視し、ねばりづよい人間形成がなされるといわれている。

門外漢のものが云々するのはどうかと思うが、我が国の農業は、自然から離れていった

いるのではないだろうか。農業は土づくり、人づくりだといわれて来たが、化学肥料のために、土が破壊されているといわれる。作物も、季節不在、そればかりか、営々として培われてきた沃土が、休耕政策のために、いまわしいせいたかあわだち草におおわれ、はては、造成地として、瓦礫で埋めつくされてゆく。悲しい極み、胸が痛むのである。

合理的、科学的ということは、たしかに技術の革新をもたらすが、それによって失われているものがあるはずである。

人づくりになくはならない自然、そして農村に、心のふる里としての、情緒性は豊かに残してゆかねばならないと思う。

七月は単に、七夕に結びつけて、文月（ふみづき）とよぶだけでは味わいが少ない。含月（ふくみづき）、穂見月（ほみづき）と、稲作との関係から、ふみづきと呼ぶと考える方が、味わいが深いと思うし、風徴月（ふみづき）と、そこはかとなく感ぜられる季節のう

つろい、秋風の気配を応ずる情緒性を、日本人は豊かに深めてきたのである。

失われた人間性の回復、人間らしい、情操豊かな人づくりは、自然や、農業との関わりの中で考えていきたい。

三、祇園まつりと子どもの教育

ふる里は、農山村だけがふる里ではない。都会には都会のふる里があり、郷愁がある。縁日の夜店、まつりの庶民的雰囲気、人間味がある。活力がある。いつまでも心のふる里としてなつかしむのである。

祇園まつりは、京都町衆の心意気といわれる。葵まつりの絢爛たる王朝絵巻に対し、祇園まつりには、中世、近世をしたたかに生き抜いてきた町衆の底力がうつぼとみなぎった絢爛さである。豪華である。

往古は、旧暦六月七日から六月十四日までのもまつりだったが、現在は新暦七月十七日か

ら二十四日までである。

旧暦の時の宵山は六月六日である。新月が西空にかかる。月鉾との対照、提灯の火に浮ぶゴブラン織り、おもうだに情趣が深い。

今、宵山は七月十六日、梅雨明け前後の暑さ、何十万という大群衆でむせかえる四条大通りに、コンコンチキチン、コンチキチンの祇園囃子が流れる。その囃の奏者は、子どもと大人が一体になって行っている。この素晴らしい一大祭典が、子供たちが参加して維持されているのである。まつりに入る何日も前から、囃の猛練習がくりかえされ、何日間もの長丁場の演奏である。

また、祇園まつりの主役は、稚児役に限られる少年である。

京で育った人びとにとって、祇園まつりは忘れることの出来ない想い出であると同時に、京をあげての祭典に参加し得たことは、その人間形成に大きな影響を与えることである。

ところが、いつもこの時機になると、学校では、ひと問題おきるのである。それは、この神事に参加するため、欠席しなくてはならない児童生徒の、取り扱いである。宗教への関わりを禁じている公教育の立場から「欠席を公欠と認めることはできない」と考えるのである。

憲法第二十條、教育基本法第九條は「国公立の学校は、特定の宗教のための宗教教育、宗教活動をしてはならない」と定めている。これが、大きな制約となってくるのである。私はこのことを残念に思うのである。子どもの心に残したい思い出をつくり、大人と一体となつての行事に参画する。こんなすばらしいことが、法のかたくなな解釈によって、制限され、子どもたちの心に傷あとを残してしまふのである。

例えばフランスでは、宗教と教育を明確に分離しているが、宗教を軽視しているのではない。むしろ宗教を、教育上重視するが故に

分離するのである。したがって、教会の祭典などに参加することは、奨励されても制限はされない。公欠扱いがされるのである。

日本の学校教育では、宗教的情操教育は大切だとされながら、それが無視され、軽視される傾向すら存する。

学校教育はも早や万能ではない。学校には学校のなしうる範囲があり、限界があることを知り、学校ではなしえられない人間形成の重要な一面が、学校以外の場でなされることを尊重し、学校、社会、家庭のそれぞれの教育機能が、うまく噛み合い、協力し合うことが今後の教育の在り方ではなからうか。

また、明治以来、かえりみられなかった宗教的情操教育、豊かな心情を養う教育を、自然の中で、伝統行事や、伝統文化の中で豊かに進めなくてはならないとおもうことしきりなる今日この頃である。

三つの誕生

なり
成 田 光 俊
た こう しゅん

(横須賀市専福寺住職)

人生には三つの誕生があります。が、多くの方々は不幸にも一つしか迎えないようです。誕生は幸せなことですから三つとも迎えないものですネ。

その最初が生命の誕生です。しかし科学が異状に発達すると、その誕生を祝う「受けがたき人身を受け……、云々」という尊い言葉さえも消えてしまいそうで悲しく思います。科学は大切なものですが、それ以上に重要なことがあることを忘れてはなりません。世界には試験管ベビーが何百人と生れ、日本もそ

の例外ではありません。男女の生み分けも可能になったと言われるこの頃、結婚披露宴や記者会見で「貴方は子どもを何人つくりますか」「二、三年先につくります」このような会話が平然と行なわれています。

わたしたちは、作られたものなのでしょう。五月末に訪れた中国のレストランで、器用に人形をつくっているのを見ました。粘土で作られる人形には顔だけが有り、注文を受けると、首、胴、足とまたたく間に出来ていきました。が、わたしたち人間は、すくなく

とも父の因と母なる因との結合という縁で、母の胎内という神秘的な世界で成長してきたのです。この神秘的な世界はいかに科学が発達しても造ることは不可能でしょう。また造るべきではありませんネ。

今日ありし 姿いづれの 因縁と

手をば合せる 日々ぞ 尊し

ほとんどの動物は生れた時に目も見えず、食べるものも、母の乳房を求めるだけです。人間も十月十日で誕生をしますが、立つことも、歩くことも、目も見えません。生れてすぐに歩かれたのは、お釈迦さまだけです。

私の家で、生れたての「ネコ」を育てたことがあります。親の顔も知らず、目も見えない「ネコ」は、お皿の牛乳さへ飲めずに、捕乳瓶の牛乳に手をかけて飲んでいたのが印象深く想い出されます。その姿は、赤子と同じでした。人間の親のなかには、赤子が乳房を

求めても自分のスタイルのために断ったり、せっかく恵まれた赤子を捨て、殺す人もあるとは悲しいことですネ。世の中には子どもが欲しいと願いつつも縁を結ばれない方々も沢山います。

子を求め 朝な夕べに 手を合す

若き夫妻の 姿 淋しき

人間は作られるのではなく、大きな恵みによって与えられるだけに、思うようにならないのです。その大きな恵みが大慈悲で、大慈悲をお持ちの方が阿弥陀さまなのです。わたしたちは阿弥陀さまの大慈悲と親の因や多くの縁でこの世に誕生させていただいたのです。

せっかく尊い生命を与えられながらも、この世を見ることもなく無常の風に吹かれてしまふ悲しい子、早々に去ってしまう人たちがいます。

早々と 去りし幼児 いまいづこ

花をたむける 母は淋しき

無常の風はまさかと思っているわたしたちに、いつも冷く襲いかかってくるのです。

今年の二月末のことでした。五十六歳のSさんは朝、奥さんと三人の子どもさんに見送られて元気に家を出られたのですが、その数分後にバス停を目の前にして倒れました。それ以来、奥さんや子どもさんたちに一声も言葉をかけることなく、四十九時間目に帰らぬ人になりました。

Sさんが倒れた時、バス停にいた人の知らせで救急車が来たのですが、そのサイレンの音を部屋できいていても「誰か知ら」と思っただけで、まさか自分の夫を乗せる救急車の音とは思いませんでした。と、Sさんの奥さんはあとで話をされていました。

このようにいつ訪れるか解らない無常の風

に乗って、わたしたちはこの世を去って行くのです。それは幼いか、若い、年を老ってか解りません。ただいえることは、必ずこの世を去る、死ぬ時があるということです。

わたしたちは、解らない世界に行くことは不安で、辛いことです。行き先が解っていれば安心です。

わたしたちは悩み苦しみが続くと「往生したよ」という言葉を使いますが、往生という仏教的な意味は、困ったことではなく、この世を去って浄土に往き、そこに生れることでこれが永遠の誕生、第三の誕生なのです。

誰れもがこの第三の誕生を迎えるかと言うと、そうはかぎらないのです。無量寿經という經典に「我が名を至心に称える者は必ず救う」と阿弥陀さまは誓われていますが、続いて「ただし五逆罪を犯した者と仏法をそしめたりけなした者は除く」とも書かれています。そこで、第三の誕生を迎えるためには第二の誕生、信仰の誕生が必要なのです。

先き立たれた人たちも、すべて第二の誕生をされたとは限りません。まして一度も手を合せたことも、真心から阿弥陀さまのみ名を称えたこともない人は、第三の誕生を迎えることは無理なのです。

わたしたちが他の動物と違っていることの一つは、頭脳があることです。そのために文化が興り、医学などの文明も発達したのですが、その反面、限りなき煩惱にさいなまれて修羅、畜生、餓鬼、地獄の世界を、またある時には人間界、天上界という六つの迷界を一日中、何度となく行ったり来たりしているのがわたしたちの姿でもあります。

そんなわたしたちではありませんが、仏の教えを読むことも、お姿を観ることも出来、阿弥陀さまを拝ませていただく手、阿弥陀さまのみ名を称えさしていただける口、念ずる心を持っている幸せな姿も持ち合せています。

人として 生れきたれし 幸せを

弥陀のみ前で じっと見つめる

第二の誕生である信仰の誕生を得ることが出来るのは、人間だけに与えられたものなのです。

今年の五月中旬、しばらく振りに五重相伝を開筵させていただきました。受者は初めての方々ばかりで、最初は戸惑いがあった様子でしたが、二日もすると変化が起きてきました。年を老った方々の身体を気づかい世話をする人。率先してお手伝いする人。それにもまして有難かったのは、五重のお手伝いをして下さるお寺さん方に自然に手を合す姿が出来てきたことです。更に、お互いが「お早ようございます」とかけ合う挨拶が合掌した姿になったことでした。四日目は大雨でしたが休む人としてなく、お互いが助け合い、励まし合っていたのです。誰れから言われたでなく自然に、お互いが頭を下げ、拝み合いの生活が出来ようになるのが第二の誕生です。

おれが おれが の「が」をすてて

おかげ おかげ の「げ」でくらす

わたしたちは自分本意で、どちらかといえ
ば人生の目的を、自分の名誉に、財産に、欲
望にと向けていることが多いように思われま
す。それがふとした縁で、阿弥陀さまのみな
をお称えしているうちに自分の「汚れた心」
に気づくのです。それは、太陽の光に照らさ
れると、机の上にあるほこりが見えるのと同
じなのです。

この世に一人で世を受けたのでもなく、ま
して一人で生きているのでもないことに気づ
かさせていただき、感謝する日々に変ってゆ
くのです。受者の方々が、成満の日に落した
涙は美しく、宝玉よりも尊いものでした。
現在はせわしい社会だといわれます。仕事
に追われ、目に見えない魔物に押えられて、
暇がないともいわれますが、自分が行く先が

解らず不安で過すよりも、永遠の世界に誕生
し往生しするのだと解らせていただいて、自
分自身が理解して、安心をした生活を送るほ
うが、より能率的な仕事も出来るのです。

そのための時間は、一生の中では殆んど一
時なのです。

多くの方々は「信仰の誕生は年を老ってか
らネ」といいますが、Sさんのような例もあ
るのです。今が大切なのです。「あとで」で
は遅い時もあるのです。

この世の中を、心から本当に安心して生活
が出来るためにも、お盆の時期に先立たれた
方々のご回向とともに、信仰の誕生を得て、
永遠の誕生を迎えることが出来るようにした
いものです。

生ぎらば念仏の切つもり

死なば浄土にまいりなん

とてもかくても この世には

思わわずらうこととなし（元祖大師）



(一) (口) (法) (話)

易しい往生と心得るのが大切

むら せ ひで お
村 瀬 秀 雄

遠江の国(静岡県)の蓮華寺にいた禅勝房は天台宗の人であつたが、己れの才能を推し計つてみて、天台教学によつて迷いの世界から抜け出すことができないと考えた。その頃熊谷入道の蓮生房が念仏往生の教えを習っているという話を聞いて、熊谷に行つて直実に会つた。直実は禅勝房に浄土の法門のあらましを教えてから、詳しいことはわが師法然上人に尋ねた方がよいといった。禅勝房は推挙の紹介状をもらつて都に上り、上人の御房を訪れた。時に禅勝房は二十九歳、上人は七十歳のことであつた。

上人は禅勝房に浄土三部經のことから始めて、本願のことに至るまでを説いていることから察してみると、禅勝房は天台教学によく通じていた学僧であつたと思われる。そのまま上人のお側に仕えているうちに、お弟子の中でも信心堅固であるという評判がたつた。恐らく学徳兼備の道心者として皆から認められるようになったのであろう。禅勝房が自力他力の心得について尋ねると、上人は次のように教えた。

「念仏はその人の才能や修行に関係なく、ただ生れついた姿のままで唱えればよいのである。知者は知者として

念仏を唱えれば往生できるし、愚者は愚者のままで念仏を唱えれば往生できる。悟りを求める心があってもなくても念仏を唱えれば往生できる。あるいは富める者も貧しい者も、身分の高い者も賤しい者も、慈悲の心がある者も慈悲の心がない者も、欲の深い者も腹黒い者も、本願の不思議な力によって念仏さえ唱えれば皆すべての者が往生できるのである」

禪勝房は念仏往生の信心をますます固めたが、やがて帰国することになり、暇をつげる挨拶をすると、上人は京土産にするようにといながらいった。

「聖道門の修行は知恵をきわめて生死の迷いから離れ、浄土宗の修行は己れの愚かさにたかえって念仏を唱え、極楽浄土に往生するのであると心得るのがよい」

禪勝房は故郷の遠江の国に帰ってから自分の信仰について誰にも話さずに、工匠として身につけた技能で生計の糧を得ていた。土地の人にもまた蓮華寺の大功の禪勝として親しんでいて、上人のお弟子の中でも名を知られた僧であつたことを知らなかった。

多念義の隆寛は比叡山の領袖であつたし、上人から直接選択集を授けた位の人であつたが、上人滅後十五年に

当る嘉禄三年の法難に流罪となり、配所に赴く途中の見付の国府で禪勝房を招いて会つた。八十歳の隆寛は四十四歳の大功の禪勝を庭に下りて出迎え、手をとって座敷にあげた。いかにも懐しげな法談を終つて帰つた時に、途中まで見送つてきた隆寛の弟子にいった。

「各々方は念仏を唱えるのに、口癖のようにして常に唱えてもらいたい。そして極楽往生をとげて下さい」

こうした様子をみていた土地の人々は急に禪勝房を尊敬するようになったので、大功の仕事ばかりしているわけにゆかず、人々に広く念仏の法門を伝えて教化するようになった。また禪勝房は次のようにいつていた。

「浄土宗の教えを学ぶには、つまり極楽浄土に往生するのはたやすい事であると心得るまでが大切なのである。たやすいと心得れば、たしかにたやすい事なのである。ところが近頃の学僧の議論にはいろいろな説があつて、まちまちに分れてゐる。仏の教えは深遠であるから、それらの邪正を弁えることは難しい。ただし先師上人が仰せられていたことの中には、決して難しい議論を口にしないことがなかつた」



夏は動の季節

賀 幡 亮 俊
か ばた りよう しゅん

(京都・上御霊町九品寺住職)

夏は動の季節。青空に気持よく泳ぐ鯉が初夏を誘う。あじさいの蕾は日に日にその輪をひろげ、椿の葉は光に濡れる。部屋の片隅に扇風機がのっそりと立っているかとみれば、梅雨がすぎるまでは要ることもあるので片づけないでいる電気毛布が、かたみせまく押入れの中で仮住居。一日の温度差が十度Cという気候に、衣桁はまだ夏衣も合着と同居する。この頃は毎日のことながら、感覚的にはつきりしない季節である。春夏秋冬の四季が生活に折目をつけて、豊かな情緒をそだててきた日本の風土も、そこに住む人のこころの乱気流に巻きこま

れたのであろうか。不順な陽気に戸迷う季節感を、意識するようになって二十年にはなる。肌着の汗ばみを気にしながら、初夏の強い日射しをがまんして、合物を身につけるといふ生き方をする人も少なくなつた。夏の衣替えは六月一日という日常の不文律は死語になりつつある。生活のテンポがはやくなるにつれて、何によらず自己主張の強い世代が社会を動かす時代になった現在、季節も先取りするのが素敵なギャル達と条件だと聞かされた。私は動の季節は夏だと言ったけれど、若者たちにとっては年中が動の季節なのであろうか。

梅や桜の堅い蕾が、陽気を伺いながら徐々に徐々にふくらんで、やっと開花するさまは、菖蒲ショウブや芍薬ショヤクやぼたんの花、そして盛夏の早朝にボンと音をたてて華開く蓮ハスとは動きがちがう。春を人間の成長にたとえるなら、一つづつ興味を満足させながら、知育され情操を身につけていく幼少年期に相当するので、私は春なら希求の季節と呼びたい。夏を動の季節る名づけるのは、若者に計画したことを真剣に実行にうつす行動力を期待することと、汗をかいて働らくことが暑氣払いに通ずるといふ体験と、青年たちの燃焼する血潮が精神を昇華させるエネルギーとなることを、切に願う私のころである。

動の季節は、祭りの季節。夏祭りは、日本各地に多いが、私の京都でも夏は祭りラッシュである。即ち葵祭り、祇園祭り、時代祭りを京都の三大祭りと称しているが、このうち時代祭りだけは、秋祭りになる。三大祭りのトップは葵祭り。今年は、五月十五日であった。この祭りは神事として風水害を鎮めるため、下鴨、上賀茂両神社に朝廷が勅使をさしむけ、神に祈ったのがはじまりと伝

えている。五月中旬の日曜を祭日に決めたのは戦後のことで、市民が祭りに参加するようになったのは明治以後のことであろうが、千四百年の伝統も祭見物の大衆に都合のよい日が選ばれるのである。人間優先の思考は、松尾神社も稲荷さんも同様である。伏見稲荷の祭りは、昭和四十二年までは四月二十午の日に巡幸祭、五月一ノ午の日に還幸祭が執行されていた。今では四月二十日を中心に前後の近い日曜が巡幸祭、五月三日の祭日が還幸祭と決っている。二月の初午行事及び月並祭はちゃんと午の日に神事が行われており、御神体は和銅四年二月壬午みづのえの日に御鎮座なされたと伝えるのであるから、お稲荷さんの祭りは午の日にするのが正しいのであろう。その上、稲作の神であった筈の御神徳まで商売繁昌にすりかえられて、上の社の御輿みこしのトレードマークである兎の杵きねつきは、ひょっとしたら稲つきではなくて黄金つきであろうかと苦笑する私である。稲作技術が向上して休耕田を必要とするまでに豊作が例年のこととなると、人はこのことを神に感謝するよりも、別の欲望の成就を祈願するようになった。商売繁昌もさることながら、病氣平癒や合格祈願などもろの願いを神に祈るのであるか

ら、神様は本当に大変だろうと思う。葵まつりもその年に選ばれた麗人が斎王代となつて、おすべらかしの髪で十二単衣の衣装をまとい輿に乗るといふ、懐古的魅力が人を惹きつけるのであろうか、今年の見物客は十八万という。けれどもこの祭りの意味を知る人が何パーセントいるだろうか。

京の祭りでも最も豪華なのは、祇園祭りである。山と称する車が二十四基、鉦かねと呼ばれる車が七基という。この合計三十一基の山鉦が神々の御輿である。祇園さんの御輿だけはみんな木製の車輪に載せられていて、人がかつぐようにはなっていない。巡幸の時は車のすべりがよいように、曲がる場所では道路に水をまいて用意した丸太棒を車輪の下にさしこんだりする。山鉦の巡幸は七月十七日、この前後が京の暑さのピークであり、暑い最中の祭見物是一種の苦行でもある。三十一基ある山鉦の町を一巡しようとすれば一日ではとても時間が足りない。四条烏丸を中心に東西南北に散在する山や鉦は、それぞれに由緒があり、美的観賞においてもじっくり味わいたいものばかりで、私などは毎年三ヶ所位で足が疲れて帰ってしまうことになる。七月十日から十三日にかけて鉦建

てがはじまるが、釘を一本も使わずワラナワで見た目にも美しく巻き上げていく技わざは実に立派なもので、これにたずさわる鳶職とろくの顔は誇りにみちている。十三日から十六日の宵山まで、夕暮れともなるとコンチキチンのお断はなの音が、一層祭り気分を盛りあげる。私も子供の頃には大きな花柄の白く染めぬかれたエンジ色の浴衣を着て、家内総出で宵山祭りに出かけたものである。宵山の雑踏にこりて今では出かけることもないが、先づ祇園さんへ参詣し、四条通りを西へ、ビツショリ汁をかいてくたいたになり、目がさめたら家で寝かされていた幼児の思い出が甦よみがえる。戦後の混乱期がすぎ、昭和三十年頃から祭り好きの人が地方からつめかけるようになり、京の町衆より他郷の人でこったがえす祇園祭りは、京の祭りというより、日本の祭りの様相を呈する。それでもこの祭りで嬉しいのは、お祭り騒ぎだけでなく、暑気払い疫病除けの神事が、鉦町の子供衆の茅巻ちまきまき売りの歌に生きていることである。信心の方は厄除けの御守り茅巻を買っていきませと云う。とかく心を忘れ形だけが動く行事が多い中で、心をこめて神事に参加することを茅巻は訴えている。

それにしても、夏祭りは多い。おとぎ話のような七夕祭りは別にして、稲荷・藤ノ森・日吉・松尾・今宮などなど、神事としてのお祭りには御輿が巡幸する。ところが、稲荷さんだけではなく、若者が御輿をかつがなくなり、自動車の激増による交通事情も重なって、御輿は自動車の上に載せられての巡幸となる。若者の肩に載った御輿が大きな鈴をならし、ワッショワッショと持ち上げる光景を知る者には全く興ざめである。私が男なら、警察に交通整理を依頼し、若者たち呼びかけて、御輿かつぎの先頭に立ちたい思いがする。台所では普通通りに鯖寿司が用意され、酒肴が客にもてなされても、還幸祭の前日に、御旅所へ御輿の参拝に出かけた私は、残念ながら地元の人達の敬神觀念の低迷をみた。これが私の危惧であることを祈りたい。

京の夏祭りの大フィナーレはお盆の十六日、夜八時から開幕される大文字である。北山五山に、大文字・妙法・舟形・左大文字・鳥居と次々に点火される。これは仏の都、京ならではの住民の奉仕による火の祭典である。

この大文字焼きは、民衆の祈りの爆発であり、祭りの総仕上げでもある。ネオンを消した夜空に、くっきりと浮かぶ大文字の火は、これを眺める人の魂まで、仏の世界へひきこむ。大文字焼きは本来魂送りの行事であり、各家庭がお盆にお迎えした御先祖様を、お浄土へお帰りに送るための送り火であった。それはまた年に一度たきあげる先祖供養の大護摩でもある。御先祖様は子孫のおたきあげする大護摩供養に、神道の方も仏法に帰依して弘誓の舟に乗って、この世ならぬ安らぎの世界へむかわれる。現世とあの世を結ぶロマンの火は、約四十五分の間、全市民を神秘のヴェールで包む。送り火が、この世の人を神秘の世界へ誘ない、亡き人を法悦の境に安住せしめるという真実は、私たち自身が了知する世界である。それはただ私たちが手を合わすところをもち、念々に起すところのもろもろの煩悩を、大護摩の火に投ずる自覚が要請される。京の夏は、神祭りでエネルギーを発散させ、仏祭りでところを清める季節でありたい。この生き方を精進してこそ、人はおのづから神仏の加護を蒙るのである。かくて京の地は、災害地変もさけて通ると、人は言う。

すばらしい子供の育成をめざして

桑原法道

(大島町教育委員会教育長
柳井市浄慶院住職)

(一) ある日のテレビ

五月五日の子どもの日、NHKがテレビとラジオによる長時間討論として「中学校教師に何を求めるか」をこらんなった方があらうと思いますが、その中で色々な統計、生徒の生の声、街の音が紹介されました。そして、

東京都の中学校の校長さんの反論で、先生方が授業以前のことでも多く苦しんでいるというのがありました。それは、万引、忘れもの、公共物破壊等ですが、これらのことは当然家庭や社会で躾けるべきことです。それを授業前の教師が一つ一つ指導しなければいけない今の社会に問題があると思います。

その上評論家は教育現場の実態も知らないで、例えば野球評論家が、ピッチャーが悪投球をすれば、そのことをクソ、ミソに批判する。彼が泥んこになって努力したことは見ようとしな。そして口先だけで真の価値観を見出しそうとはしない。そうでなく、親が、

「これが私の娘です」

「これが私の息子です」

と胸を張って言える子供を学校におくるべきだと思います。

評論家達も一日でもよいから学校に行ってみて、生徒の生活の中にはいつて批判すべき大切な時だと思っています。

(二) 当面している中学校の

諸問題

私は二年前まで中学校の現場で働いていました。その当時の私達のグループ、全国中学校校長会(全日中)の会長さんが、退職校長会に次のような貴重な原稿をいただきました。

それを紹介しますと、中学生の健全育成と暴力非行生徒への対応についてであります。

度重なる中学生の校内暴力事件等の報道により、中学校教育を担当する者に対し、厳しい批判もありかと思いますが、全日中では、今年度も、この問題を第一に取りあげ、全生徒の健全育成に積極的に取り組むと共に、はみ出し生徒にもきめ細かい指導を併せ行うように対応しています。

中学生の校内暴力事件の発生件数については、五十七年度は警視庁統計によると前年度に比べ激減、警察庁統計によると激増の傾向を示しています。しかも年度中、中学生等による浮浪者殺傷事件、教師による刺傷事件まで発生しました。

全日中としては、この実態、傾向を集約、検討し、全国的視野に立ち、今年度も具体的な対応策を打ち出し、改善への実効をあげるべく意欲的に取り組んでおります。

この生徒指導に関しては、三年前から生徒

指導特別委員会を特設し、五十五年度には、「校内暴力アンケート調査」を実施し、生徒指導上の諸問題、家庭、社会に対する要望、校長のリーダーシップ等について見解をまとめ、五十六年度は「校内暴力指導事例」を集約し、学校の指導体制の確立、家庭、地域の教育力の回復等について見解を述べ、五十七年度は校内暴力を除く問題行動全般の傾向及び、日常の生徒指導のあり方について見解をまとめ、全国の中学校経営の参考資料として活用願うことにしています。

私どもは、常にりっぱな日本人を育てたい、心身共に健康にして自主的に取り組める中学生を育てたいと、戦後から民主主義教育の徹底を目指して努力しているが、現在の教育は必ずしも私どもの願ひとは裏腹に、荒廃してきているといわれてもやむを得ません。暴力・非行・犯罪・中学生自身の体質、知育、徳育、体育のアンバランス等学校教育における問題点。核家族、教育ママ、だめおやじ、指

導看護能力欠損等家庭教育における問題点。学校や家庭の問題点を生み出している社会の不健全な傾向等もその要因として指摘されます。

まさに、中学生はこの複合型の教育環境に強く影響をうけているわけですが、中学生自身にも責任があります。中学生自らに自覚ある言動を求めながら、併せて周囲にいる者がその改善の方法や手順をわが事として、身近なところから改めていくことが肝要であると考えます。

次に、教育正常化への取り組みです。校内暴力事件等の爆発にも大きく関わっているのが、教師集団の問題です。校長の学校経営方針等が反対されたり、押し戻されるような学校では、思うようなしつけ教育はできません。主任手当の抛出が八〇数億円に達しています。まだ主任制度の定着していない学校もあります。

(三) 雄叫び

この教育危機存亡の時、仏教徒は今立ちあがる時と思います。

山口教区では、教区長、教化団長の英断で「児童教化委員会」を教化団の中に設立しました。そして十七年も続いている「よい子の集い」の反省と、各寺で一日でも、二日でも子ども達を集めて、念仏会の開催を願い、開催寺には資料を無料で配布し、又指導者もその寺に派遣することを決定いたしました。今年の教育目標は、日常の五心の中から

- 一、ハイという素直の心
- 二、おかげさまですという合掌の心
- 三、ありがとうという感謝の心
- 四、すみませんという反省の心
- 五、わたしがしますという奉仕の心

の前者の三つを取り上げました。

今、学校教育の中で一番欠けていることは「ハイという素直の心」です。ハイという素直な心は、ありがとうという感謝の念からでてくる合掌の出来る子の教育が第一だと信じます。

少年が大自然の中で、楽しいゲーム、キャンプを中心に「仏と国とに誠を尽くしおきてを守ります」のちかいにより素直な少年のボーイスカウト、ガールスカウトの育成に皆さんの手をお貸し下さい。法然さまもきっとお喜びと思います。

十二月の議会の休憩の時、町長さんが、私の部屋でお茶をのみながら「教育長壁にかかっている五心はすばらしいですね、これを全議員さんに配って下さい」と、早速皆さんに配布しますと「こんな良いものは全家庭に配って下さい」と、とうとう町内全家に配りました。町長さんも、議員さんも皆真剣に少年の健全育成を願っておられます。

全国的運動「小さな親切」八カ条の中にも、

一、朝夕のあいさつをかならずしましょう。

二、はっきりした声で返事をしましょう。

三、他人からの親切を心からうけ入れ「ありがとう」と言いましょう。

四、人から「ありがとう」といわれたら

「どういたしまして」といましょう。

五、紙くずなどをやたらにすてないようにしましょう。

六、電車やバスの中で老人や、赤ちゃんをだいたおかあさんには席をゆずりましょう。

七、人が困っているのを見たら、手伝ってあげましょう。

八、他人のめいわくになることはやめましょう。

この五心と小さな親切の八か条を中心にした子ども会、日曜学校を全国のお寺がつくつ

たら、今の中学生の非行は四〇五年たったら根本的になくなり、この世の浄土が生まれると信じます。

現在の教育は実践教育の時代に入っていると思います。私の町、大島町教育委員会も、今年は「大島教育元年」を宣言しました。それは、五心と「小さな親切」の町として実践活動に満ちた町をつくることです。

私達も、東京の校長さんが提言された「これが私の娘です。これが私の息子です。」と胸をはって言われるだけの雄叫びを!!

私達が教育した仏の子どもを見て下さい。

「これが私の娘です。これが私の息子です。」仏の子として、ハイという素直な心で、おかげを喜び、合掌の出来る子どもの育成に精進しようではありませんか。

(ご感想を〒742 柳井市片野浄慶院までお願いし
ます 合掌)

◎『浄土』表紙版面絵販売についての案内

『浄土』誌の遅配が続いており、まことに申し訳ありません。

どうか今後また、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版面絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版面絵物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の分、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東京) 八―八二―八七

特別寄稿

ビルマの子供たち



長谷川 岱潤
はせがわ たいじゅん

ユニセフ「青年の翼」の団員としてビルマに入って幾晩めか、私達はマンダレイホテル前で行なわれていた連邦記念日のお祭りを見た後、通訳のミョートンさんにホテルの部屋で、ビルマの子どもたちが大晦日に歌うという「ア・ボンジーオー」「おじいさん、来年の大祭りを見るまで生きていて下さい」という、心暖まる歌をおそわり、そして次に私達が、日本のことわざをいろいろと紹介していた時でした。一人の団員が、

「今回ユニセフのウォータープロジェクトのベースキャンプに寄ったとき、蛇口をひねっても水が出なかったでしょう。ああいうことを『紺屋の白袴』とか『灯台下暗し』とかというんですよ」

とおっしゃり、私達が吹き出して笑ったときでした。「ビルマの人は、そうした意味のことわざは、決して悪い意味には受けとりません。なぜなら、ビルマの人の生き方、生活心情はそのことわざどおりなのです。子は



—セパウ小学校—

親のために、親は子のために、そして何よりも「仏・法・僧」のために、自分のことなど顧みることなく、全て捧げるのがビルマ人の生き方なのです」

とミョートンさんは大まじめな顔で答えました。

この話しは、ある意味で私のビルマ人に対する見方を決定づけた話でした。

一人当たりのGNPが、四万三千円位（一九八二年）という数字が示すように、極貧国といえるはずのビルマの人々の表情が、全ったくそれを感じさせないゆとりに満ちているのは、このビルマ人気質によるのでしょうか。

バゴダの国として知られるビルマの人々は、想像以上に信仰心のあつい仏教徒でした。ビルマの子どもたちにも、尊敬するものを順に上げてもらおうと、迷わずに「仏・法・僧・親・先生」という返事が返ってきます。何処へ行っても、ア・ボンジーオーを歌うと、ビルマの子ども達にはこにこしていっしょに歌ってくれました。

バガンに程近いセパウ町で、小学校の授業を拝見させてもらいました。

ビルマの初等教育は五年間で、五歳で入学する幼児クラスと、それに続く四年間の小学教育に分かれ、その上

に中学教育が四年あり、中学までは授業料は全て無料と
のことでした。

私達が伺った六歳の小学校一年生のクラスでは、もう
英語の授業が行なわれていました。ノートがなく石版で
書き方の練習をしている姿に「戦前の日本みたいだね」
という団員の声が聞こえました。ビルマの小学校では、
国語であるビルマ語と、買ひ物ができる程度の算数、そ
して国としてもっとも力を入れている英語、この三つの
課目しかありません。音楽も体育も図画もほとんどの小
学校では、その道具がないためにできないとのことでした。
また理科や社会は中学に行ってから習うそうです。

家の遠い子どもたちはお弁当を持ってきました。飯ごう
のような鉄のお弁当箱が、外の風通しのいい日陰に並ん
でぶら下げてあります。教室の中ではむれてくさってしま
うからとのことでした。どのお弁当もごはんだけでお
かずがありません。学校ではPTAの寄付で毎日二時に
おやつを用意するとのことでした。今月のおやつの献立
を見ると、粉ミルク、ヤシの実の黒砂糖、さつまいも、
豆等々と書いてあります。おやつといっても栄養を考え
た補給食といえましょ。この小学校は生徒が三七七人

で先生が十人でした。ビルマの小学校は普通生徒六〇人
に先生一人と聞いていますから、ここは相当に恵まれた
方の小学校といえそうです。

ビルマの女の子は、顔にタナッカー(柑橘類)という木
の樹皮をすりおろした粉をつけて、日焼け止めをしてい
ます。どんな小さい子でも化粧のように顔に塗って
いて、とてもおしゃれです。実際に塗ってみますと、ひゃ
んやりしてとてもすずしく、ビルマの人の智慧だなあと
感心しました。また、男の子もロンジーという巻きスカ
ートをはくのがビルマ人の正装で、ここの小学校の制服も
白いシャツに緑のロンジーです。きれいな好きのビルマ
らしく、とてもすがすがしく清潔感がありました。

ラングーの小学校で仲良しになった、八歳の女の子
ソーニューエちゃんは、連邦記念日のお祭の様子を
かいた絵をくれました。連邦記念日は国をあげての大変なお
祭りです。記念日の二月十日を目標にして、一月の末ご
ろから全国各地でお祭りが行なわれます。大通りのとこ
ろどころにアーケードが作られ、その道路わきに舞台が
作られます。各地で日を決めてお祭りが行なわれ、序々
にその祭りの開催場所が首都ラングーに近づいてきま



—セバウ小学校・教室風景—

す。二月十日ラングーンの街中で方々に屋外ステージが作られ、ネオンまたたくアーケードが大通りのところどころに作られます。女の子達はよそいきの服装を着て、記念写真を撮っています。舞台では歌や万歳、民族舞踊



—ボランジー村・ハンセン氏病予防センター
における身体検査—

等が行なわれ、この目ばかりは子ども達も夜遅くまでおきて楽しんでいました。明るく笑いかけてくる子ども達ですが、ビルマの自然は大変厳しいものです。乾燥地帯では五月と六月しかま

とまった雨が降らず、年間の降水量が八七センチしかないところがあります。赤茶色の土壌の巻き上がる粉塵はすさまじいもので、ある地区では三歳から五歳の幼児の、およそ七―一％はトラコーマにかかり失明の危険性をもっているとのことでした。そして水が不足し、また汚ないため、下痢が慢性化して体力がつかなく、ちょっと病気になるとなかなか直らなくなるとのことでした。また



—ソーユーウエちゃんの絵—

ビルマの風土病であるハンセン氏病も大変はやっていて、昔から比べれば随分少なくなったものの、撲滅まではまだまだ時間がかかりそうです。我々の訪ずれたボラシギー町のハンセン氏病予防センターでも、ちょうど子どもたちの身体検査をやっていて、その早期発見に懸命でした。

ビルマは貧しい国です。しかし人々の心は決して貧しくはありませんでした。むしろこれから確実に伸びてゆく国という印象を受けました。それはビルマ語の「ありがとう」という言葉「チーズ・ティンバーデュ」の直訳が、「功德を積みましたね」という意味からいえると思うのです。お礼の言葉が、逆に相手に「よかったね」と言っているこの国の人々は、自分が何かしたときに、決しておごった気持ちにはならないだろうと思うからです。

どんな貧しそうな村に行っても、ひとときわ際立ったバゴダ（仏塔）や仏像があり、お参りをしている熱心な信者がいます。またビルマの家庭にいくと、必ず東の方向には仏陀をまつる棚があり、仏像か、仏陀やバゴダの絵または写真が貼られてあり大切に供養されています。

それもそのはず、ビルマの男性は一生に一度は僧院に入り、仏道の修行を三ヶ月はしなければ一人前に見なされないのです。ですから皆若い時僧院生活をして、信仰をしっかりと身につけているのでしょう。そして、そうした親の姿を見て育つビルマの子どもたちは、物質的には裕福ではなくても、仏さまや親や先生に、自分のことなど顧みないで奉仕する心をもっていました。大変にすばらしい心差しです。

冒頭にかかげた話を聞いたとき、日本人の「餓鬼」のような心を想い出し恥かしくなりました。今や「衣食足りて礼節を知る」ではなく、衣食足らずして礼節を知るに改めなければならぬのではないかと思います。布施する心の喜びを教えてくださいましたビルマの人々に感謝したいと思います。

村瀬 秀雄 著

|| 好評新刷 ||

『和 訳 法然上人 勅修御伝』

B 6 判 八四七頁 価六八〇〇円

|| 好評 ||

『和 訳 浄土三部経』

B 6 判 四七四頁 価二五〇〇円

『和 訳 法然上人 選 択 集』

B 6 判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 善導大師 観経四帖疏』

B 6 判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 善導大師 六時礼讃』

B 6 判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人 鑽仰会

浄土句集

一田牛畝選

花の雨小袂からげし尼僧かな

福岡 行正一如子

評 花の雨が降り続いている。小袂からけた尼僧が下駄をはき、蛇の目の傘をさしている。きつと花の京の景色と想像される。

母の忌を修しお墓へ青き踏む

福岡 上滝津弥音

評 母の仏事を済しお墓詣りをした。いよいよ暖くなりお墓のあたりは草が青々としている。その草を踏みつつ母恋し。

評 鯉幟は風を得てはためいている、祝って貰っている孫はまだまだ何のことか不明である、皆こうして育つのである。

街騒を逃れしはしの夕桜

山形 松田 光誉

東京 吉田ゆきあ
跡取りの決まり安堵の風薫る

評 道端に子雀を見つけた。帽子に拾って家路へ。子雀は帽子の中で啼いている。

まことに可愛いものである。

評 跡取りは決った。増上寺大殿にて結婚式を挙げる事が出来た。お寺も安全、親も安心、めでたい極みである。

東京 真野 竜

志す門せまくとも大試験

三重 森 静枝

親も安心、めでたい極みである。

うららかに富士みはるかす賀宴かな

福岡 荒牧 還愚

評 うららかに富士山が見える座敷にて宴たけなわである。めでたい限りである。

初蝶の剪る水仙に眠りおり

福岡 服部 光代

鯉幟孫は喜びまだしらず

福岡 高良 幸代

出不精の老いも身軽るに五月晴

東京 猪瀬 幸子

春の宵昨日につよく絵本読む

御浄土もこの世も楽に置炬燵

福岡 荒牧 亀齡

東京 新井 新生

お地藏に賽銭あげし春隣

静々と枝垂るゝ雨の桜かな

長野 友洲旋風子

一つづゝ椿の咲いて庭静か

東京 田中 秀代

初蝶や何か思い出ある様な

母に似し牡蠣打つ仕ぐさなつかしく

花冷えの寺人氣なき厨口

埼玉 佐藤 泰子

京都 安藤 寛

雨の中さくら開いて雨に散る

菩提樹の緑蔭に腰旅づかれ

荃立や山の畑の一家族

福岡 安藤平次郎

東京 吉原登起子

友迎ふあいにくの雨春炬燵

今年また桜を賞つる母とゐし

花の句碑京の西山東山

大分 丹羽 難中

東京 栗原やえ子

さゝなきの上手になりしこと楽し

陽炎にぼかされゆくや思ひ事

地の人にこつを習ひて松露掘き

福岡 行正 明弘

東京 末常てる子

雛仕まひ又来年と独り言

稚児の手で甘茶そそげる誕生仏

行く先は花のお浄土天寿仏

福岡 植藤みきを

東京 真野よし子

すぎ間なく敷つめ萌える大ふぐり

眼帯を解きし目を射る新樹光

仏蹟をめぐり日焼けて戻られし

一田 牛敵

(仏)
(教)
(行)
(事)
(一)
(年)

七月の行事

——七夕と七日盆

驚わ見み定じょう信しん

〈お盆〉

七月はお盆の季節であった。ちょうど一月が正月行事ひといろに塗りつぶされているように七月は盆の行事に彩どられている。盆は十三日から十五日（または十六日）までと考えるばあいと七月中を盆月と考えるばあいとがある。この違いは現在と過去（といっても昭和のはじめ以前）の相違といえる。または墨絵でみれば、濃淡の違い

とみた方がよいかもしれない。現在では十三日から十五日がクローズアップされているが田舎ではまだそれ以外の習俗が残っている。十三日から十五日（十六日）が死者霊を迎える最も重要な儀式の期間であり、この前後は準備期間であったり、後始末の期間であったりする。いわばこの全体が七月の盆の行事であると考えられる。

しかし本当にそうなのであろうか。今一度七月の行事

を思い起してみよう。まず七夕がある。ネブタがあげられる。こうした行事は盆とどのような関係にあるのかをみていきたい。

〈七日の行事〉

七月七日は行事の多い日である。

七月の神奈川県平塚の七夕祭、八月の仙台の七夕は観光行事として有名であるがそれだけではない。東北から関東にかけて地元では知られた七夕祭がたくさんある。祇園祭が関西に広がっているのに対して関東では七夕祭が分布している。鈴木棠三は東北地方には大仕掛けな七夕送りの行事が幾つもあって観光行事化しているが、これは関東以西のような派手な祇園祭がないことへの埋合わせといったものであろう、どちらも穢れを水に流す点で共通していると教えている。同様の行事には津軽のネブタで有名な眠流し^{ねむりながし}がある。鈴木は夏越の祓えと眠けを流す行事が重ねられたもので本来は神送りの行事であったという。夏越の祓えの民俗行事として発展したものがネブタと呼ばれ、七夕流しと呼ばれたとみてよいのではないだろうか。夏越の祓えの民俗的売出としての七夕流

しやネブタに対して、七日はお盆の準備に入る行事の日でもあった。ミガキボン、ハカナギ、ボンミチズワリ、トウロウタテ、イケガニボンとお盆の準備の行事が残されてきた。無論これらは七月七日（八月七日）だけの行事ではない、七月一日（八月一日）に行われるところもある。しかし大体は七日の行事とみてよいだろう。

七夕やネブタそして盆の行事、そのひとつひとつに独自の説明や由来がみられる。しかし生活のリズムにとけこんだ、人々にとっては一連の繋がりをもったものとしてうけとられたとみられる。地域のおかれた状況や位置によってひとつひとつの行事が本来的な性格をかえて全体としての一つのまとまりのなかに改めて位置づけられることもあったと考えたい。七日という日が、盆をひかえて物忌にはいる日と意味づけられることもあれば、盆とは別の行事としてうけとってきたところもあった。この違いは地域のおかれた文化的、歴史的な違いとかかわっているとみることができる。いづれにしても七日の行事である七夕と盆迎えの行事をみていこう。

〈七夕〉

七夕に笹竹をたてて願いごとや和歌を書いた短冊をつるして星に祈った記憶は誰にとってもそう遠いものではないだろう。七夕の翌日川に笹を流すのも楽しい遊びであった。しかし私達が行ったような形での七夕ができないには相応の歴史があったようである。一つの要素は乞巧奠である。もう一つは固有信仰の神迎えの行事である。この二つの要素があいまって現在の形をなしたといわれている。乞巧とは「技工、芸能の上達を願う祭」（国語大辞典）であり、奠とは「酒食を供えまつる。またそなえもの」（国語大辞典）である。乞巧奠とはそなえものをして技工、芸能の上達を願うまつりということになる。女の人が裁縫が上達するように願うことや、書道がすすむように星に願うのは乞巧奠の名残りである。これは中国において牽牛と織女が年に一度合うという星合の伝説にもとづいて生れた行事という。日本には奈良時代に宮中においておこなわれたが、時代が下るにつれて本来の星祭りから和歌、菖、花などの遊びの祭りにかわってきた。江戸時代には貴族にかぎらず武家にも広がったが同時に民間行事のタナバタの習俗もとりいれられた。

笹竹の使用である。乞奠の変化した七夕祭に対して民

間行事としては神迎えの神事があった。水辺の忌屋に籠って神の来臨をまつという筋書きをもつ行事である。

折口信夫が「水の女」で述べたところによれば、川や海に設けられた棚で機を織る乙女が棚機つ女（タナバタツメ）であり、この名がつまんだものがタナバタであるという。タナバタの名称については別の説明もある。五来重は、タナバタは棚幡であるというものである。五来は棚機姫とか乙棚機姫という幻想は、中国の七夕の織女というものと、わが国の祖霊祭の棚幡が結合したところに生まれたものであろうと推定している。つまりタナバタのタナは棚であり、ハタは祭壇に立てる笹竹村祖霊の降り留るべき依代であるので、その聖なる標示として、先端に幡のような幣を下げることからでたものとみている。語源の由来がどうであつたにしても基本的な内容は水辺（川、海）の機屋やタナを祭場としてより来る神を迎えてまつり、翌日神に穢れを託して送る行事といえるだろう。民間行事としてのタナバタの姿を民俗誌からひろってみよう。岩崎敏夫編による「東北民俗資料集一」には典型的な例がみえている。長くなるが引用させていただくことにする。

——六日、朝早くから、ハカハライといって寺に行つて墓を掃除し、婦りに寺から、タナバタにする竹をもらい受けてきて、午前中に門口に立てる。夕食事に「タナバタさまには長いものを供える」といって饅頭などをお膳で縁側に供える。六日の昼すぎから、高城川の河原に、あるものは川の中に杭を立てて萱で屋根を葺き、小屋を作る。小屋には棚を作り、入口には歩み板などを渡し床には舟の板子などを敷く。子供では作れず大人が作つてくれる。この小屋で子供たちが男女それぞれ別にして、組で材料や、一、三銭ずつ持ちよりママコダズ（ままごと）をする。ご馳走は小屋の外の流れの岸に竈を作り、変りご飯、饅頭のオクズカケ、南瓜などを煮炊きする。これらをタナバタさまに供えるといつて棚に供え、小さい子供たちが招待されてご馳走になる。小屋はほぼ部落単位で作られ、女の子の年嵩のもので指導的な役のものをテীগタ（定方）と呼ぶ。川に沿わない側の町内では屋敷内の隅に小屋を作る。この行事は正のはじめごろまで行なわれた。この小屋から川へ飛び込んで水浴びなどをして遊んだ。タナバタ飾りは次の日に枝を払つて川へ流すか、虫がつかないようにと、大根畑に立てる。

〔身崎こはる談〕 庄子礼子採集

この採集をみる限りでは「タナバタさま」は先祖霊と考えられているようである。普通来臨する神は農神でもあり、祖霊でもあるといわれる。しかし実のところは微妙な違いがあるようである。普通七夕と盆とが区別されているところでは、神と祖霊とは違ふところと推測できそうである。ともあれ、民間行事としてのタナバタと、乞巧奠に起源をもつ七夕が習合して、近代の七夕祭が生れたことはまちがいないさうである。民間行事としてのタナバタは神を迎え、送るといふ一貫した筋書きを持っているが、その意味は穢れを払うことにあつたこともまた事実である。わが国の神祭りは、十五日を中心としていたことは周知のことである。タナバタを七日だけの祭りとするのではなく、十五日と一連のものとしてみると違った様相がみえてくる。物忌に入る日としての七日である。いわばこうした固有信仰の筋書きの上に、仏教が導入されてきて盆の準備としての七日盆、盆花迎、磨き盆などが、七日にあてられたことはほぼ推測できる。

〈七日盆〉

お盆は七月一日（六月末日）からはじめられるとする民間習俗に釜蓋朔日がある。一般には地獄の釜の蓋があく日として知られている。死者霊が地獄から解放される日と考えられていた。残された人々は帰りくる霊のために目じるしをたてた。灯籠である。できるだけ高くかかげた方がよいとする土地もあるようにいづれも竿の先につるした「高灯籠」である。これが一日から新盆の家々にかかげられた。この名残りが岐阜提灯にとどめられている。現在でいえば「新盆灯籠」である。この他新盆の家に米を供える盆供打も一日である。親戚、縁者は新霊のために米を供えるのである。寺院の施餓鬼会に新盆の霊のために草履、センス、米、こずかい（お金）を一つに結んだ掛袋が供えられるが、盆供とはこれに相当するものである。霊が帰りやすいように標示（提灯）をたて、施食を用意する。ところによっては盆路づくりといって墓の道を掃除する。こうして盆の準備の第一段階はおわる。

第二段階は、七日である。墓の掃除（墓払）、仏具の清掃（磨き盆）をすませ精霊棚に飾る花（盆花）を摘む。（盆花採りは野山から花を摘んでくるのだがこの時霊もついてくるともいう）準備の最終段階は十一日から十三日である。盆供え物（盆市）を用意し、迎え火を焚いて「お精霊さん」をお迎えする用意がすべてとのへられたことになる。

盆を七月の行事として、ここではその準備段階をみてきた。江戸時代ではほとんど一カ月にわたって盆が行われていた。しかし近代になって短縮された結果、七日が盆の開始のときになったといわれる。民俗に残された盆行事が七日に多いのもその故であろうか。しかし七日が十五日に対してもっていた位置を考えれば、単に一週間短縮されたから七日と考える必要はない。むしろ七日は他日にかえがたい日であったと考えればよいだろう。七日以後には短縮できなかったのである。正月行事は対応させてみると明らかであろう。つまり、七日正月に対する七日盆である。

念佛ひじり三国志余聞

——十年に及んだ連載を終って——

寺内大吉
てらうち だいきち

足かけ十年に及んだ長い連載を書き上げる

と「終った!」という感慨が強くなるものだが、不思議と「この念仏ひじり」にはそれがなかった。なお連載が継続中で、先月と同じ感触でペンを取ろうとしている。

これは情性でもなく、また書き足りなかったわけではなく、思うに描いてきた対象が巨容すぎたためであらう。法然上人の像が、その足跡が容易には把握しきれなかったからにちがいない。

今後形式を変え、視座を移して、くり返し法然像と取組むことであらう。新しい資料

の発掘や解釈がそれを促すはずである。

つい先日——六月九日、ぼくは洛南を歩いた。鳥羽街道をたどって、淀川の堤防に立った。

賀茂川と桂川が合流し、淀の大河となつて畿南平野へ流出してゆく発起地点だ。すぐ南方に鳥羽大橋が見える。

此処が鳥羽港の跡なんだな、と旧記を思いうかべる。

法然上人が存世した十二、三世紀へかけて、こんな大堤防はなく、いちめんの大河口がひろがっていたことであらう。東西九町、

南北六町、水深八尺はあったと言われる人工湖——大沢池である。

現在、賀茂川と桂川とを分断した突出丘陵が鳥羽離宮の跡だったにちがいない。もっとも当時の賀茂川はもっと南方を流れており、この丘陵もさらに前方へ押し出されている、現在の鳥羽大橋あたりが鳥羽港の岸壁だったであろうか。

そこに南楼門がそびえ、港にはおびただしい船群が繫留されていたか。商船や貴人の持ち船、遊覧船など、そして法然上人を西国へ運んだ流人船も此処から出発したにちがいない。

法然諸伝の記述から推量すると、上人の乗船はかなり大きく、そこへただ一人乗りこまれたらしい。とすると、芦刈り船で門弟が前後しながらお別れしてという記述は、この流人船へ乗りこむ以前に何処から法然上人が小舟で運ばれた事実をほのめかしている。

鳥羽港の大土木工事は院政開始とともに起

工され、後鳥羽院のころは荒れ放題になってしまったとつたえられる。その荒れ放題とは、治水に手を加えなかったために大沢池周辺の田畑が全面的に冠水してしまったのであろう。出立の前夜を離宮一隅の収容所で明かした上人は（おそらく取調べがあつて）、小舟で西国へ向う流人船まで運ばれたにちがいない。

ところでぼくが立っている大堤防のすぐ足もと、淀川とは反対の斜面に小さな寺院がある。一念寺という浄土宗の寺だ。その境内へはいつてゆくと、本堂のすぐ裾に見落しそうな棒状の石が埋めこんであつた。

——法然上人舟繫ぎ石。

この石が、鳥羽港の岸壁にあつて西国へ向う流人船を繫いだ石なのか、それとも小舟のものなのか不明だが、こんな地点に「遺跡」として残っている点を注目したい。

地形や水容は全くさま変わりしていたが、それだけに法然上人の流刑出発の場面を、ぼくにいろいろと思い描かせてくれた。絵画的口

マンがひろがるのである。

ちなみに旧加茂川の複雑な水路を縫って鳥羽港の岸壁へ出るためには大沢池の浮き島「中島」を東南面を迂回してゆかねばならない。中島は現在の中書島であらうか。

☆

最終回で明遍と親鸞とを会わせた湖北の峠

愛発——

あらち、と読むので、本誌の文は誤植である。

近江舞子から琵琶湖添いに北上して、今津を過ぎて海津へ至る。そこから山路へはいると愛発越えになる。現在の行政区分だとそこはもう敦賀市山中町になる。

奈良時代には関所があったという。

僧道鏡との政争にやぶれた惠美押勝が北国へ逃がれようとして、この愛発を越えようとした。

——精兵数十ヲ遣シ、愛発ノ関ニ入ラン

トス。授刀物部ノ広成等拒デ之ヲ却

ク。押勝進退抛ルトコヲ失テ即チ船

ニ乗リテ浅井郡塩津ニ向ウ。忽チ送

風有テ船漂没セントス。是ニ於テ更

ニ山道ヲ取リテ直チニ愛発ヲ指ス。

伊多智等之ヲ拒ンデ八九人箭ニアタ

リテ亡ス。

「続日本紀」の記述である。この淳仁紀宝
宇八年九月(七六四)愛発には近江と越前とを
区切る関所があったことがわかる。惠美押勝
はこのあと湖上で捕捉されて斬られている。
平安朝にはいり愛発の関所は廃絶されたが、
源九郎義経の奥州逃亡をはばもうとして復活
したことが「義経記」にある。

法然が四国へ流罪へなった時点で、親鸞も
越後へ流された。京都から童華ノ関を越え、
湖西添いに北上して愛発を越えていったこと
が明らかである。

親鸞聖人の詠と伝えられる歌碑が残っているらしいからである。

越路なるあ、ちの山にゆき別れ

足も血潮に染むるばかりぞ

らしい、としたのはよく自身その歌碑を目撃していないからである。滋賀県の山々に精通していないからである。滋賀県の山々に精通した郷土史家伏木貞三氏の「近江の峠」による。

この伏木さんは古くからの知己で、よくが住職をする寺の「本跡」とも言うべき滋賀県浅井町の大吉寺に関する諸資料を送ってくれたことが文通の機縁となった。彼はその浅井町に住んでおり、最初の著書「近江の山々」の出版時にもよくが序文を書いた。

「本跡」の大吉寺は浅井長政の菩提寺でお市ノ方や淀君ともゆかりが深い。その名跡がなぜ武蔵の地に再建されたのか。思うに小谷

城の陥落とともに織田信長の手で浅井大吉寺も焼かれたが、反織田の連合戦線を画策する足利亡命將軍、その意を体した関東管領吉良家の手になったのであろうか。わが大吉寺の創建年時が小谷城落城の翌々年にあたっている。

話は脇道にそれるが、浅井町の大吉寺をぼくが訪れたとき、米原駅頭に伏木さんはぼくの旧友を伴って出迎えてくれた。その旧友は天正宗教問答で名高い安土浄厳院の住職で、ぼくとは大正大学で級友だった勝山定信君だった。

二人の関係にいぶかっているぼくに伏木さんは娘さんが近々勝山君の長男と結婚するのだと告げた。まことに「ふしぎ」な縁で、ぼくはこの結婚式で戒師をつとめた。

閑話休題。

愛発峠にある親鸞聖人の歌だが、それがほんものかニセモノか。詮索するのは愚かなことであろう。ここにぼくは伝説、伝承の実体

というものを洞察しなければいけないと思う。
つまり遠い昔から建永の法難で越後へ流された親鸞がこの峠を越えていったことが語り継がれてきたにちがいない。語り継ぐだけでは忘れられてしまう。こんな歌が造られたものかどうかは不明にせよ、伝承を「物証」ではっきり後世へ伝え残しておきたかった点を留意しなければならない。

伝説、伝承とは古き時代の「物証」である事実に、ぼくらはあらためて気づくべきである。事実をゆがめて歴史をつくろうとする記録などよりも遙かに真実性をふくんでいる場合もある。とりわけ宗教史の検証には見落してはならない。

☆

藤原定家の日録「明月記」は、時代背景を知る上で貴重な資料である。ただし定家の執筆姿勢はつねに自己保身に周到な配慮を忘れない点も一考しなければならない。

九条兼実の嗣子良経の死などは、その前後がごっそり欠落していて、かえって定家自身もこの事件に一枚噛んでいたのではないかと疑惑の眼を光らせたくなる。

これは些細なことだが、建仁二年九月二日の記事に「退出シテ寂蓮入道ノ旧跡ニ向ウ。天台宗、今日法事ト云々。但シ一人モ来訪セズ」とある。

寂蓮は定家の従兄で「新古今集」の撰者までつとめた歌人である。この建仁二年の七月に六十四歳で死に、九月二日は四十九日忌にあたる。だがこの記述では定家が何処の寺へいったのか不明である。

ところが「山城名勝志」によると同じ九月二日の記事に「早且、宝寺へ行ク、沐浴云々」とある。編者大島武好がみた「明月記」が現在伝わるものと異本であることがわかる。宝寺とは通称山崎寺、宝積寺である。

その前年の十月、定家は後鳥羽院に供奉して熊野参詣へ出かける。帰洛してからの記事

に「去ル十七日、女院御出家ト云々。此ノ御堂ニ於テ此ノ事アリ。法然房參シテ勤ムト云々。但シ殿下、頻リニ難渋シ申サシメ給ヒ、御髪ヲ被(き)ラズト云々」と書いている。

女院は宜秋門院で、殿下は九条兼実だ。法然が宜秋門院出家の戒師を勤めたが、父の兼実はその落飾を強く拒んだという。

この記事は六年後の世に伝えられてきた鈴虫・松虫事件と密接に関連するであろう。後鳥羽院熊野参詣の留守に小御所の女房たちを出家落飾させたことが専修念仏教団弾圧の口実になっているが、この記事から推測する限り、法然とは全く無関係であることがわかる。

兼実の態度が「明月記」のとおりだったとしても、高貴な身分の女性を法然が落飾などさせないことは明白である。ぼくが後鳥羽院側近たちの策謀、讒奏だとした論拠である。

法然だけではない。安楽や住蓮たちにしてもそんな軽挙は犯さなかったであろう。

彼ららしき念仏ひじりたちが捕縛され、拷

問を受けたのが建永二年二月九日の「明月記」にある。「近日、只一向専修ノ沙汰、搦メ取ラレ、拷問サルト云々。筆端ノ及ブ所ニアラズ」——このすぐ翌日の記述は「今朝兼時朝臣、入道殿ノ御使トナリテ参ズ。専修ノ僧ヲ相具スト云々。専ラ申サルベキ事ニアラザルカ。骨鯁ノ御本性、猶以テ此ノ如シ」とふれている。

入道殿の九条兼実が念仏ひじりたちの逮捕に抗議して、近臣を送りこんでいるさまがうかがえる。しかもその近臣兼時に専修の僧を同行させているのである。

大胆というか叛骨逞ましいというか、「骨鯁ノ御本性、猶以テ此ノ如シ」と定家はあきれて、舌を巻いてもいる。ただの叛骨だけではなく、兼実としては法然及びその門弟に加えられた断崖が、いわれないむじつの確信があったからにちがいない。

☆

ぼくはこの長篇を叙述してゆくにあたり、三人の念仏ひじりを主人公に設定した。高野の僧都明遍、盲目の琵琶法師生仏、そして住蓮房である。

住蓮は建永法難の渦中にあった人物で例外だが、明遍、生仏ともに念仏ひじりとしては異流である。明遍は当時トップクラスの学匠だったが、早くから高野山蓮華谷へ遁世し、いわば法然とは同じようなコースを歩んだ同格の家ひじりである。

ぼくは明遍の胸中にいつも法然へのライバル意識があった、と断じたかった。それが晩年に至って絶対に憑依したのはなぜだろうか。どんな過程をたどって彼の知性や情念が専修念仏へ帰一していったのだろうか。

保元、平治の争乱当時、政治の中核にいた信西入道を父とし、兄たちには法然に多大の影響を与えた遊蓮房円照がおり、また澄憲、聖覚父子も兄であり甥であった。

明遍の魂の軌跡をなぞってゆくだけで、法

然の核心に触れ得る、と信じた。

盲目の琵琶法師生仏はバイプレイヤーである。盲目であるし、琵琶法師という立場からも教学や実践教化の第一線には立ち得なかったであろう。しかし、「平家物語」の作者である可能性も濃厚だったし、かりにそうでなくとも、琵琶物語を通じてこれを天下にひろめた役割だけは充分に果たしたはずである。

となると三位中将重衡の説誠や鹿ヶ谷陰謀にも深くかわったと考えられる。そして浄土門の歴史としては聖覚法印の入寂直後、出雲路に記主禅師を訪ねてゆき、彼を鎮西上人のもとへ送りこんだ仲介作業が如何にも重くぼくらの胸へ喰い入ってくる。

内外共に激動をきわめた法然門の中核にあって、その盲しいた眼で念仏ひじりたちの動静をじっと凝視してきた人物として、ぼくは彼を副主人公にえらんだ。

それと、これは書き手側からだけの都合だが、歴史小説を書いてゆく場合、資実が明確

でない人物は甚だ便利なのである。フィクションの領域を思いきって拡大できるからである。そのひろげた領域が、歴史そのものにもロマンの色彩を加味させることができる。

明遍、生仏、さらに住蓮までふくめて適切な資格者だったとぼくは思っている。

盲目の生仏は別として、明遍や住蓮にぼくは若き日の友人像を「かさね絵」にしたつもりだった。若き日の姿ばかりでなく、その後の足跡もほぼ把握している。彼らの人生行路を追懐しながら明遍や住蓮の運命をなぞっていった。

いささかでもこうした歴史上の、それほどポピュラーでもなかった人物に、読者が体臭や現実感をおぼえてくれたとしたら、この本人が全く不在な形で使用されてしまったモデルの効果であらう。

☆

ぼくが未だ大正大学の学生だったころ、そ

れは戦争が苛烈化への斜面を一気に駆けおりてゆく時代であったが、教室の講義内容にも戦時色がふんだんに盛りこまれていた。なかには阿弥陀仏を天皇と直結し兼ねない暴論もあった。

いや、それを「暴論」として聞き流すだけの余裕がぼくらにはなかった。ほんとうに阿弥陀仏がこの日本へ現出されたのが天皇なのだろうか、と真剣に考えこんだり、仲間どうしで討論し合ったものである。

それを信じたまま、あるいは迷いつつ戦死していった級友が幾人もいたはずだ。

果たして法然思想の核心において、王仏は冥合するのであるかどうか。

これへの糾明が『念仏ひじり三国志』を書き起こす動機となったことは間違いない。

「四十八巻伝」は法然が讃岐へ流罪となる直前の心懷を「上人のたまわく。流刑さらにうらみとすべからず」もはや年齢も八十歳に近く、このまま都に住んでいても娑婆の離別

は遠い先の話ではない、と語ったと伝える。そして「念仏の興行、洛陽にして年久し。辺鄙に赴きて田夫野人をすすめん事、年来の本意なり。しかれども時至らずして素意いまだ果たさず。いま事の縁によりて年来の本意を遂げんこと、すこぶる朝恩とも言ふべし」と続ける。

こんどの流刑を穏和に受けいれて、地方教化が出来、これも「朝恩」——天子の恩だとする法然の心懷。

文面どおりに丸呑みしてしまえば「王権優先」となってしまう。法然は今度の流刑を「恐れ入りました、幸いにもこれを機会に地方の念仏教化に精を出すことに致しましゅう」ということになる。

でもそれが法然の本意だったとしたら、同じ建永二年の秋、赦免になった途端、なぜすぐに畿内へ舞い戻ったのであろうか。地方に腰を据えての「年来の本意を遂げんこと」もヘチマもないではないか。

これに続く文章を精読しておかないと法然の真意は汲み上げられないであろう。

「此の法の弘通は、人は止どめんとすとも法は更にとどまるべからず。諸仏済度の誓い深く、冥衆護持の約、懇ろなり。而れば何ぞ世間の機嫌をはばかりて、経釈の素意をかくすべきや」

まさしくあの戦時下、教場で王仏冥合を高唱したわが碩学はきびしく反省すべきだったであろう。何ぞ世間の機嫌をはばかりて、経釈の素意をかくすべきや、である。

やんわりと「朝恩」ぐらいのニュアンスを致し方ないにしても、教義の根本をぐらつかせるべきではなかった。

さらに「四十八巻伝」は、

「ただし、いたむところは、源空が興する浄土の法門は、濁世末代の衆生の決定出離の要道なるがゆえに、常随守護の神祇冥道、さだめて無道の障難を咎め給わんか、命あらんともがら、因果の空しからざる事を思い合わ

すべし。因縁尽きずば、なんぞ又今生の再会
なからんやとぞ」

と法然は結んだと伝えている。

念仏為先の断固たる姿勢を、法然はつらぬ
いたのである。

つまり法然は外面上、過激に王権へ反抗こ
そしなかったが、内面では寸土も譲歩しな
かったのである。

だいたい法然の流刑が決定した時点で、念
仏停止は院宣として全国的規模で発令されて
いた。それが、流刑者の身で地方へ行って念
仏教化をやる、と公言したこと自体、王法に
そむいている。それを百も承知の法然であっ
た。

これが後年の日蓮聖人の如く、王仏冥合を
根本理念として、鎌倉武家政権にだけ咬みつ
いた政治上の権力闘争とは甚だ質を異にして
いるのである。「禅天魔」と罵りながら、禅
宗に帰依した北条時頼が執権職に就くと、俄
かに禅への攻撃を中絶する日蓮であった。

過激派や邪流分子も多く混入していたにち
がいない念仏ひじり集団。そんななかであ
る法難の混乱時、中核の念仏上人たちが法然の
真意を身に体して耐え抜いた風雪の跡を、ぼ
くは少しでもこの作品で書きのこしておきた
かった。

☆

稿を書きすすめながらぼくが最も迷い、か
つ興味をそそられた存在が時の権力者後鳥羽
院であった。

いったいこの帝王は、どういう人だったの
であらうか。

矛盾が多すぎた。行動に不明な点が目立ち
すぎた。ひとすじ縄では収縛できない人格と
言える。

あえてこれを帝王特有の「気まぐれ」と言
ってしまえばそれまでだが、彼がのこした数
々の歌詠をくり返しひもといってみると、端倪
すべからざる才能の持ち主だったことがわか

る。ただその才能はシャープすぎて政治家としての奥行きがなかったようだ。

念仏教団の断崖もその一環だが、鎌倉との対立を年ごとに激化させて、遂に承久ノ変へ突入してしまう。惨敗して隠岐島へ流される。

北海の孤島でどのような生活を送ったか、詳細はわからない。わずかに歌境の完成と専修念仏への帰依が消息として残されているだけである。

その専修念仏への帰依だが、嘉禄二年（一二二六）の正月には法然の流れを汲む西林院の僧正承内に念仏往生の諸問題を書面で問いかけてきている。そして亡くなる直前には有名な「無常講式」一巻を書きのこした。その一節に、

——漸く七十になんぬれば、老いとともに又病む。来世近きに在り。あに暗然として眠らんや。寒氷紅蓮の暁の嵐には袂を重ぬるの妻妾あるべから

ず、黒闇泥梨（ないり）の夜の煙には枕を扇ぐの子も来るべからず。兄弥陀の号（みな）を唱えて、蓮の上を欣ぶべきなり

と念仏の功德を強調している。

流刑十九年の孤島生活で、権力も物慾も失った人間後鳥羽院が丸裸になって、阿弥陀仏の救いをひたむきに求めるのであった。

環境の激変があったとは言え、こうした魂の遍歴をかえりみると、建永年時の苛酷な弾圧が嘘のように思われるであろう。当時二十八歳、若き独裁者が側近の甘言追従に軽躁したと判断するのが常識だ。

その側近者として、ぼくは山ノ僧都尊長、那智ノ検校長岐、防鴨河使判官だった秀能をえらびましたが、彼らが承久ノ変の共同謀議者だった事実を裏付けとしている。

もちろん彼らは悪役の代表であって、有形無形に彼らを支持した宮廷貴族や知識人のオ

ポチュニストぶりも罪深い。当時最高の頭脳と評判の高かった慈円僧正などはきびしい批判の対象となるはずである。

ことわっておくが、こうした作品の骨格が十年前、筆をおろそうとしたとき、ぼくの内で整備されていたわけではない。幾多の疑問点を、書きすすめながら追究してゆくうちにおのずと組み上がってきたのである。その意味では「成りゆき」まかせだった制作態度を否定できない。

すでにこの連載は単行本五巻にまとめてしまったが（四巻まで既刊、五巻は八月初旬発売予定）かなり加筆除去した部分があることを諒解して頂きたい。連載中には筆勢が渋滞して時間稼ぎの「遊び」がふくまれていたからである。

第一巻が上梓されたとき、直木賞作家の伊藤桂一君が手紙をくれた。彼とは三十年近い交友であるが、毎月の『浄土』を寄贈しており「毎月、愛読していた念仏ひじり、あの浄

土誌は一号の欠本もなく保存してきました」と暖い言葉をくれた。

この伊藤桂一君に限らず、毎月辛抱強く読んで頂いた人々にあらためて深謝の意を表したい。これは『浄土』の編集部の諸氏にも献げたい言葉である。

（昭和五十八年六月三十日記）

◎編集子後記

寺内大吉先生が、足かけ十年、百九回に渡って連載された『念仏ひじり三國志』は、前号をもって無事に最終回を迎え、ここに完結いたしました。全五巻を予定する単行本も、すでに既行四巻が毎日新聞社より公刊されています。この間、ともかく編集子の不手際から、誤字や誤植頻繁な文面となってしまう、せつかくのロマンの興趣を大いにそいでしまったこと、今、心よりお詫び申し上げます。寺内先生、長い間ありがとうございました。

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時、「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字用紙五枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十九巻 七月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十八年 六月二十五日 印刷
昭和五十八年 七月 一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒二〇三 振替東京八―八二―八七番

待望の本格八仏教／歴史巨篇／

毎日新聞社から好評のうちに発売中！！

念佛ひじり三國志

—法然もわづる人々—

寺内大吉 著

四六判・上製 全五卷（各巻定価一三〇〇円 千各二五〇円）
直木賞作家が10年の歳月をかけて遂に完成
香り高い歴史ロマンの超大作

—第一・第二・第三・第四巻発売中—

毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋一ノ一

振替（東京）四一五六五三四

第四十九巻

七月号

昭和十年五月二十日

（第三種郵便物認可）

毎月一個一日発行

昭和五十八年六月二十五日印刷

昭和五十八年七月一日発行